View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

三・一一における魯迅経験

著者	阿部 幹雄
雑誌名	近代世界の「言説」と「意象」 : 越境的文化交渉学の視点から
ページ	111-131
発行年	2012-01-31
その他のタイトル	3.11 and Lu Xun's Experience
URL	http://hdl.handle.net/10112/6333

三・一一における魯迅経験

阿　部　幹　雄

3.11 and Lu Xun's Experience

ABE Mikio

The big earthquake which makes the Tohoku district Pacific coast the focus on March 11, 2011 also combined the tsunami which occurred after that, and brought destructive damage to the stricken area.

Damage was further expanded according to the situation of the radioactivity diffusion in the explosion accident of not only the usual natural disaster but the first nuclear power plant of Fukushima that started after the occurrence of an earthquake.

the form where the revival from this East Japan great earthquake also including a nuclear power plant disaster holds the death of radioactivity which is not in sight in everyday life — not carrying out — it does not obtain but differs from the revival from a general natural disaster greatly.

In this announcement, it was regarded as the decisive cutting point of the "postwar" space materialized by "deterring" the radioactivity in which nuclear weapons also contain "3. 11", and the appearance of a new survival space which surrounds us after "3. 11" is pointed out.

Moreover, things, such as a problem of the quality of the media in the present which has surfaced in it based on the presenter itself "3. 11" experience, an intellectual, the public, and a problem of enlightenment, will be considered through Lu xun

一、はじめに

二〇一一年三月一一日、午後二時四六分に東北地方太平洋沿岸部を震源とした大地震が発生した。直後に発生した大津波によって被害は拡大し、

地震と津波による死者・行方不明者は二〇一一年一一月二九日付けの警視庁のホームページによれば、併せて約二万人に近づこうとしている。直接的な人的被害の他に、家屋崩壊や道路崩壊といった物的被害も甚大で、住む所を失い仮設住宅等へ避難している人々も多数にわたる。その後、東日本大震災と命名された一連の出来事から一〇カ月近くが経とうとしている。ある程度の時間が経って「復興」はやっと軌道に乗り始めているかのようである。今後紆余曲折を経て進行していくであろう「復興」にもすでに様々な問題が噴出しており、今後も問題は出続けるであろう。もともと漁業や農業等の第一次産業を中心とした地域産業が振るわず、人口流出と過疎化に悩んでいた地域がこの度は壊滅的な被害を受けた。そのことを踏まえると「復興」は震災の直接的な被害からの回復だけではなく、むしろ震災以前の様々な負債も抱え込んでいるという意味で、二重のマイナスを背負って進められていくだろう。それゆえ、今回の大震災からの「復興」が先の阪神大震災の復興とは些か前提が異なることがわかる。関西における一大商業圏の一角を担っていて、経済活動がもとから活発であった神戸の「復興」とは明らかに違うように思われる。

ここまで書いて、もちろん私に現在進行中の「復興」について具体的な提言とか批判というものが特にあるわけではない。何でも「復興」としてしまう、いわゆる「復興イデオロギー」にいささか違和感を覚えずにはいられないにせよ、もとから私には「復興」を論評すべき具体的な知識も資格もないままただ日々の報道を聞き流しているだけだ。しかしこの度の大震災からの「復興」はそれまでの単純な自然災害からの再興といったものと違うことぐらいはわかる。それは前述したような経済的条件だけから、例えば阪神大震災の「復興」とは違うというのではない。関東大震災、第二次世界大戦、そして阪神大震災と日本は近代史において幾度かの「復興」を経験し、それらの記憶が全ての国民の共有できるある種の「神話」として流通している。この度の東日本大震災からの「復興」もその系譜に位置付けたい欲望は日々の報道などから痛いほど伝わってくるが、それでも今

回は「復興＝成功」に収斂していく「復興」には到底おさまりつかないことはすでに明らかであろう。もちろん、そのように断言できる原因は、今回は大災害だけではなく、福島第一原発の放射能漏れによる汚染の被害も受けているからである。

三・一一以降に発生した福島第一原発の爆発事故、その後の東京電力、政府の対応、拡大し続ける放射能汚染については、これまですでに多くの事が様々な視点から語っており、今後もしかるべき人たちが検証していくことであろう。また原発継続か反原発かといった日本の今後のエネルギー問題についても盛んな議論がなされている。もちろん本稿で語るのはそれらについてではない。本報告では三・一一の東日本大震災が発生した後の数日間の私自身の体験から考えたことを語っていきたい。それゆえ、今回の報告は自身の体験を説明し、そこから色々と論じていく形を採るので、話題は多分に時事的な話題に傾き、文体と形式も通常の学術論文のそれとはかなり異なることを前もってお詫びしておきたい。

二、バーチャルリアリティ？

実は今回、本報告の構想を思いつき、題を『三・一一における魯迅経験』として申し込んでから、私は自身のある種の「軽薄さ」に愕然とし反省したのも事実なのである。まず「三・一一」という、語弊を恐れずいえば「流行り」の、トピックを選んでしまったことへのある種の「安易さ」への反省であり、「三・一一（以後）」を語ることよって、「三・一一」を「消費」してしまうのでは、という恐れである。つまり今現在夥しい数で流通している「三・一一」をめぐる言説の布置にあまりにも警戒が無さ過ぎるのではないか、という反省である。また次に関西で発表するという「場所」への無自覚さである。一九九五年一月の阪神淡路大震災についての歴史的・思想的意義を了解しないまま震災について語ろうとすることへの反省と、今回の東日本大震災から発生した一連の問題群についての東日本と西日本

との「温度差」を自覚しなければならないのではないか、という反省である。そして最後に今回の東日本大震災からの体験を東アジアに共通の問題として語ることの困難さへの無自覚である。

またつきつめていくと自らがはたして「三・一一（以後）」を語る権利を有しているのかという問題につきあたる。厳密にいえば、私個人は何ら直接的な被害を受けず、地震発生当時は東京にいただけであった。ただ単に自分の実家が震源地に近い宮城県というところにあるだけである。そしてその実家は家屋の損壊といった被害は受けたにせよ、壊滅的といえるほどの被害は受けてはいないのである。事件を語る際に必要な「その場に居た」という当事者の特権性を誇示しえないまま語る場合、何を根拠にその出来事を「語る」のか。また自らの体験をまがりなりにも人様に「思想」として伝えるということはどのようなことなのか。言い訳めいたことを長々と書いてしまったが、確かにこれらは単なる言い訳に過ぎないものでもあるが、一方で今回の「三・一一（以後）」の体験は、私に学術的な論文も含めた「表現」そのものの問題を考えさせる契機になったことは隠しようのない事実でもあった。「表現」そのものの問題についてはまた稿を改めて考えることとして、とりあえずまずは「三・一一（以後）」からの私自身の経験をまとめてみたい。

三月一一日の午後二時四六分、地震発生時、私はたまたま東京の自宅に居て無事であった。最初に強い揺れを感じた時、まず思ったのは実家のある宮城は大丈夫だろうか、ということだった。実はその二日ぐらい前に、宮城県北部を震源とした震度五弱ぐらいの地震があり、東京でこれだけの揺れならば、宮城や福島などが震源の場合、相当な大地震であると推察できたからだ。東京の自宅の方は本が倒れたぐらいでたいしたことはなかったが、宮城の実家に電話をしても当然つながらず、テレビがない私はラジオとネットから今回の地震の大きさを知ることになった。津波で沿岸部がひどいことになっていると聞き、ネットでも津波に関する情報や映像が夕

方までにはちらほらと出てきた。東京の自宅の方は夕方までには電気ガス水道は復旧し、それからというものはずっと東京の自宅に籠っているしかなかった。それから数日間は今振り返ってみると実に不思議な日々であった。テレビも視聴できるようになったパソコン画面をじっと見つめ、最新の情報が更新されずに、衝撃的な津波等の映像が繰り返し放送されるのを眺めながら、自分のなかの現実感覚がどこかおかしくなっていたような気がしていた。今から振り返ると、この時ほど自分のなかの「現実」が断片的に送られてくる情報と映像によってのみ構築されていた時はなかったように思える。そう思ってしまったのは、この度の大震災とは、実家が被災したという点で半分は自らと関わりのある出来事だったからであろう。確かにこれまで数々の衝撃映像は見てきた。湾岸戦争、阪神大震災、九・一一テロなど、思いつくだけでも様々な衝撃映像をみてきたが、そのどれもが自分とは直接的に関わりのないこととしてやり過ごしてきた。もちろん「やり過ごした」と自分では思っていたとしても、実際は無意識的にそれらの映像や情報が己の「現実」を構成していることは常識としてわかっていたつもりであった。近代的なメディアの発達により、視角、聴覚といった機能はものを「見る」というものから、すでに見ているもの、聞いているものを「確認」するための媒介に過ぎなくなってしまったといえる。例えば旅行を思い出してもらえばよい。それはガイドブックやテレビ番組の「確認」のためだ。我々はすでに見たものしか見られなくなっている。そしていわゆる現代文学というのも既存のテクスト（＝すでに書かれてしまったもの）からいかに距離をとるかという自覚から始まったのだといえる。

その意味では自分の現実感覚がどこかおかしくなったという前言は、もともと自分はまっとうな現実感覚を持っていたと理解でき、明らかな間違いであろう。私の大震災後の数日間は、もはや現在の誰一人としてメディア社会の磁場から逃れられない以上、この社会では極めて正しい「現実」形成の過程だったといえるのだ。もちろん、現地に居たら違ったかもしれないし、直接的な被害を受けた人たちの現実は映像や情報で構成された「現

実」よりもはるかに苛酷で本来は類型化できないものであろう。しかし直接経験していないものがその現実を知る術はあくまでメディアを通してでしかないというジレンマを抱えざるをえない。被災者の個別の現実はニュースやドキュメンタリー番組の「〇〇問題」の「多様さ」のなかに回収されてしまうか、より厳しい現実は例えば雑誌の目玉として商品化されるだけなのである。つまり現実は様々な媒介を通して「現実」となるしかない。確かにそれは現実ではないかもしれない。しかし我々にとってはその「現実」しか知りえないのである。

もちろん私はここでメディア報道のあり方を批判するつもりはない。またメディアの虚偽性や現実を伝えきれないということで言葉（これもまぎれもなくメディア＝媒介である）の無力さを今更論じるつもりはない。そもそもここは一大メディア論を展開する場所でもない（もともとそんな能力は私にはないが）。ただいえることは、マスコミが真実を伝えていないと批判しても現在ではそれが本質的な批判とはならない、ということである。問題は、今現在の我々がネットの情報も含めた、そのような「現実」に拠ってでしか判断や行動ができないという状態の方であろう。真実を伝えているにせよ、デマを流すにせよ、メディアの情報は物質的な力となって我々を取り囲む。問題は情報というものが真偽の問題ではなくなっている時代に我々が生きているという今更ながらの現実である。それは魯迅が次のように論じた状況を引き継いでいるといえよう。

> しかしながら、以前にすでに述べたとおり、現在の新聞が力を失ったことも事実である。だが私は記者先生が自らご謙遜なされるように、一銭にも値せず、少しも責任がないというまでには、やはりなっていないと考える。というのは、新聞は、より弱い者に対しては、その人の運命を左右する若干の力をまだ持っているからである。言い換えれば、新聞はまだ悪をすることができる。―当然、善も成すことができるのである。「無力だ」とかいう言葉は、責任ある新聞記者が採用して

はならない常套句である。なぜなら、実際は、そうではないからである。新聞は選択をするし、影響力がある。[1)]

これは自殺したとされた映画女優の阮玲玉（一九〇五－一九三五）について述べた際の文章にみられる一節である。人気女優であった彼女は自身の結婚や裁判をめぐるゴシップによって自殺をしたとされ、一部メディアが批判された。糾弾されたメディア側は「新聞報道はもはや官制ソースのものだけで、新聞の地位や威信は哀れなもので、誰かの運命を支配する力など少しもない」と答えたのであるが、それに対する見解である。もちろん、新聞はより正確な報道を心がけ、同時に内容の真偽をよく見極められるような成熟した読み手に教育し、新聞が「善を成す」方向を目指すことも一つのあり方であろう。だがやはり重視したいのは、新聞は悪を成そうが、善を成そうが、「選択をし、影響力がある」ことなのである。メディアの物質性は何より近年のネット社会によって顕著になって来たことはいうまでもない。

確かにインターネットの情報は、これまでのような一元的な情報の管理に風穴をあける有効なメディアとしてあったはずだろう。実際、ネット上でも様々な情報が飛び交い、多くのコメントが書き込まれていた。重要なのは実際に被災したものの多くはネットに書き込む設備も余裕もなかったということだ。つまりほとんどが局外者の書き込みであり、そのみるみる増殖していく様をただ眺めているとここでも一つの「現実」が形成されつつあることを痛感させられた。そしてその「現実」のなかを、何ら積極的な意味ではなく、「生きている」と。しかしネットにおける情報の多様性は私にとっては単なる情報の拡散に堕すだけで、焦点の定まらない言葉の羅列はかえって私に判断停止をもたらしたことは事実である。もちろん、私

1）魯迅「論『人言可畏』」（一九三五年五月二〇日、『太白』半月刊第二巻第五期に発表）、後に『且介亭雑文二集』に収録。『魯迅全集』第六巻（北京、人民文学出版社、二〇〇五年）、三四五頁。

には氾濫する情報の真偽を見極めるほどのいわゆる「メディアリテラシー」なるものが備わっていない単なる「情弱（＝情報弱者）」だけなのかも知れない。実際、震災直後の混乱にあっても、ネット上にはたくさんの有益な情報が現地から発信されたと聞く。だがその数日間、私は「情弱」でも何でもいいから、とにかくそのパソコンの電源を切ることしか心理的安定を得る手段はなかったように思える。

> 諷刺作家は、たいてい、諷刺されたものによって憎まれるけれども、彼は、つねに善意の持ち主である。その諷刺は、その人々の完全を希望しているのであって、決してそういう人々を永遠に水底に押しこもうとするのではない。しかしながら、やがて同じ人々のなかに、諷刺作家があらわれるときには、その人々はもはや収拾できなくなっている。書くことによって救出することは、なおさら不可能である。だから、その努力は、たいていは、徒労でしかも逆効果を生じさせる。実際には、その人々の欠点ないし悪徳を表現するだけで、敵対する別の人々にとっては、逆に有益になる。私はこう思う。別の人々から見れば、感じ方が諷刺された人々と違っていて、彼らは、「諷刺」的よりもむしろ「暴露」的だと思うはずだ。
>
> もし諷刺らしい作品に、少しも善意がなく、全く情熱も欠き、ただ読者に、一切の世の中のことは、何一つ取るに足りず、何一つする価値もないと思わせるだけなら、それは諷刺ではない。いわゆる「冷嘲（れいちょう）」である。[2)]

今振り返ってみると、当時のネットも含めたメディアの情報は私にとって善意や情熱を欠いた「暴露」であり「冷嘲」にしか思えなかったのかも

2）魯迅「什麼之『諷刺』？」（一九三五年九月『雑文』月刊第三号に発表）、後に『且介亭雑文二集』に収録。『魯迅全集』第六巻、三四一－三四二頁。

しれない。もちろん、放射能の危機的な状況と東京電力の欠点ないし悪徳を逐一知らせてくれた人々の「善意」は疑うべくもない。しかしその「善意」もやはり私にとっては単なる「暴露」にしか思えなかったのである。

三、「情報」の過剰さと過少さ

もちろん私が情報の過剰さに辟易して情報を遮断したつもりになっていた一方で（それはそれで完全に情報を遮断することなどできないわけだが）、被災地では情報の少なさに行き詰っていたとも思うのだ。最前線の情報過少と後方の情報過多という形が震災直後の一つの構図として浮かび上がる。私も含む後方にいたものたちは、メディアというものがそもそも都市向けのものでしかないにせよ、総じて直後の数日間は、ひょっとすると今も、あまりにも敏感かつ雄弁でありすぎるような気もする。それは震災発生の二日後ぐらいから問題にのぼりはじめた放射能をめぐる対応でより顕著になった。放射能に過敏に反応したのは福島第一原発周辺から約三〇〇キロ離れた後方に位置する東京の人たちだった。もちろんそこで報道された東京脱出の模様や商品の買い占めなども誇張された報道に過ぎなかったかもしれない。しかし私の所にですら東京脱出を勧めるメールが来たくらいだから、相当数の一斉メールが出回っていたと考えてもよいし、電車の規制や計画停電など、どのような形にせよ東京全体が動揺を見せていたことは確かであろう。ここでまず思ったのは情報の過剰によって過剰な反応を見せることができた人々がいる一方で（実際に放出された放射線量から「過剰」などではないという反論もあるかもしれないが）、被災地では限られた情報で限られた行動をとらざるをえなかった人々がいるのでは、ということであった。実際、政府、東京電力の発表は嘘だらけかもしれない。しかしそのような情報にすがって判断し行動するしかない状況に被災者は居たのだと思う。問題はそのような最前線を知りつつ選択された後方に居る者の行為が、極めて思想的な問題になったということだ。つまりやや誇張に

なるかもしれないが、最前線の人々を人柱にしてまでも東京から「逃げる」という行為によって、その当人の思想性や人間性までもが試された瞬間でもあったような気がする。そのような一つ一つの選択や発言に全存在が賭けられた時間であったという意味で、あの数日間は確かに非常事態であったのだろう。もちろん、それは一般的にいわれているような「肝心な時にその人の本性がわかる」といったレベルに過ぎなかったのかもしれないし、逃げなかったのは思想的な問題云々ではなく単純にお金がなかったからだ、とかそういった単純な理由であっただけかもしれない。実際、しばらく経つと放射能という危機が去ったわけではないのに、完全に非常時から日常へと戻り、当時の危機は「復興」の出発点となる悲劇として回収されてしまった。

四、「まだ大丈夫だ」という人たち

だがやはりあの時はよくある人生訓に収められる事態ではなく、あくまで思想が問われていた瞬間であったと思うのだ。あの瞬間は、今までの災害ではありえなかった状況であったはずだ。つまり福島や宮城の被災地では大災害から逃れた後も、さらに放射能という目に見えないものから逃げなければならなかったのだから（実際、多くのものは逃げようもなかったわけだが）。そんななか、私はあるメーリングリストで仙台において被曝を回避するために少しでも多くの被災家族を集合避難所から関西方面に脱出させようとしている市民運動家のメールを連続的に受け取っていた。実際、限られた情報と限られた条件のなかで、少しでも多くの人たちを脱出させようとするその努力には大いに頭が下がる思いであった。もとより私はその人の活動を批判するつもりはなかった。被曝の問題などは、特に子どもを持つ人などにとって切実な問題であるのだから。

ただしかし、頻繁に送られてくるメールのなかで、仙台からの脱出を決断できない人たちを「冷静な判断ができない人たちがほとんど」「まだ大丈

夫だと思っている人たち」と表現したことにどうしても引っ掛かってしまった。このようないい方をする自分は「冷静な判断ができて」、「まだ大丈夫だ」と思っている人間とは違うのである、と読めてしまった。そうわかった時、私にはこの言葉がとてつもなく差別的で暴力的な言葉のように思われたのは事実なのだ。もちろん、慌ただしいなかで書かれた言葉を殊更とりあげるのは公平でないことは十分に承知している。メールからひしひしと伝わる現場での様々な困難からつい出た言葉であったかもしれないわけだから。しかし仙台を離れなかった人のなかには様々な葛藤（故郷を離れることへの躊躇、血縁・地縁のしがらみなど）があったと思うのであるが、彼らを「冷静な判断ができない人たち」「まだ大丈夫だと思っている人たち」といってしまうことで、彼らの葛藤を飛び越え「脱出する自分」と「脱出しない他人」との違いを「情報」の解釈の相違に還元しているように読めたのである。複雑な葛藤を結局「（愚かにも）政府・東電の情報を信じている人たち」と「（賢明にも）『嘘』を見抜ける自分」とにまとめてしまっているというように。その意味でとても「差別的」かつ「暴力的」な言い方に思えたのだ。

脱出しない／出来ない人たちを「冷静な判断ができない人たち」と差別化した瞬間、その状況は悪しき啓蒙の構図に陥ってしまう。「真実（＝放射能の怖さ・東電と政府の嘘）」を「知っている」自分と「知らない」彼ら／彼女らとの間に明確なヒエラルキーが出来あがるのである。少数の先覚者とその他大勢というお馴染み（？）の構図である。確かに、条件的にそうならざるをえないのであるが、実際仙台を脱出した人々は限られたものであった。だが単純に「残された」人間はどうするのであろうか。私の両親は福島県との県境付近で、仙台よりも福島第一原発に近い場所にいる。それよりも近い福島の人たちがいる、さらにそれよりも最前線の原発敷地内で必死に冷却作業をしている人たちがいる、そのような人たちは「冷静な判断ができない」「まだ大丈夫だと思っている」馬鹿なのだろうか。もちろん、これがいいがかりに近い冷静さを欠いた批判であることはわかるし、

何より私が後方で何もできずただ手をこまねいて見ているだけの不甲斐なさから来ているのかもしれない。しかし、様々な逡巡も含めた上で、当時福島に残るという選択はいかなる意味でも尊重されねばならない。そこに「決断」という形で主体的に行動をとれたもの／とれなかったものという価値基準を導入してしまえば、確かに東電・政府の嘘情報を正しく見抜け、正しい認識に基づき主体的な行動を正しくとれた自分は誇示出来るであろうが、残った人々の存在は「正しく主体的な行動をとれなかった人」として一気にかき消されてしまう危険性が出てしまう。もちろん、くりかえすが、誤解しないでほしいのは、私は何もその脱出を呼び掛ける行動それ自体は全く非難するつもりはないし、その行動力には自分には到底まねできないこととして敬服している。また現場では外野が到底口出しできない苛酷な状況があったかもしれない。しかしその後、状況を伝えてくるメールからわかる「賭け」や「子どものために」といった悲壮な言葉が、逆に独りよがりのヒロイズムとして読めてしまったことも事実なのだ。つまり自分の現場での格闘だけが強調しまっているように思われた。もちろん現場で闘っていたのは彼だけではない。そこでは逃げ場も無いままに最低の尊厳である自らの命を守り抜こうと奮闘していた現地の人々がいて、そして誤解を恐れずにいえば、そうした民衆の安全を確保しようと困難極まりない作業に懸命に取り組んでいた自衛隊員や消防員、警察官、そして東電職員たちもいたわけだ（もちろんここでは自衛隊や東京電力の組織を全肯定するという次元とは別の問題になる）。自らの悲壮感がつづられればつづられるほど、そこから「残った人々」の存在は見えなくなってしまったように思われる。

「残った人々」と脱出を呼びかける人との差別化が、啓蒙の構図とだぶった時、私には魯迅の『吶喊・自序』での「鉄部屋」の比喩が思い起こされた。あまりにも有名であるが、ここで引用してみよう。

『かりにだね、鉄の部屋があるとするよ。窓はひとつもないし、こわ

すことも絶対にできんのだ。なかには熟睡している人間が大勢いる。まもなく窒息死してしまうだろう。だが昏睡状態で死へ移行するのだから、死の悲哀は感じないんだ。いま、大声を出して、まだ多少意識のある数人を起こしたりすると、この不幸な少数のものに、どうせ助かりっこない臨終の苦しみを与えることになるが、それでも気の毒と思わんかね』。

『しかし、数人が起きたとすれば、その鉄の部屋を壊す希望が、絶対にないとはいえんじゃないか』。

そうだ、私には私なりの確信はあるが、しかし希望ということになれば、これは抹殺できない。なぜなら、希望は将来にあるものゆえ、絶対にないという私の証拠で、ありうるという彼の説を論破することは不可能なのだ。そこで結局、私は文章を書くことを承諾した。[3)]

もちろん、「残った人々」は「鉄部屋で熟睡していた」わけではない。「鉄部屋」というわけではないが、交通網が遮断され、ライフラインが寸断された、閉ざされた空間のなかで各人が悪戦苦闘していたわけである。「鉄部屋」で安眠をむさぼっていたわけでは決してないにせよ、彼／彼女らの「残る」という判断が知識や決断の「遅れ」と判断されたとき、その判断を下したもの自身は無意識的に自らを「先進＝進歩」の側に置くことになる。ここで注目できるのは魯迅の引用からは鉄部屋の比喩が「死」のイメージで語られていることである。「死」への自覚の有無が鉄部屋で安眠をむさぼるものと壊そうとするものの違いとなっている。確かに東京も含め福島・宮城からの脱出を勧める者も、放射能という、見えない「死」を過剰なまでに意識していたといえるであろう。「残った人々」は、見えない「死」よりも破壊しつくされた風景のなかでより直接的な「死」の恐怖を感じていたとはいえ、その脱出を叫ぶ人々の「（放射能による）死」にはあまりにも

3）魯迅「『吶喊』自序」、『魯迅全集』第一巻、四四一頁。

警戒が浅いと非難されているのである。殺されて（＝窒息死）させられてしまうぞ、というイメージを喚起すること、これが魯迅のイメージした「啓蒙」だったともいえる。確かに『吶喊』の冒頭を飾る「狂人日記」では主人公の強烈な「死」への恐怖（＝「食う／食われる」ことへの強迫観念）が作品全体を支配している。またその他の「薬」や「孔乙己」などの作品も「死」がその作品世界に大きな影を落としているのはいうまでもない。その意味では魯迅の目覚め＝先覚者のイメージとは「死」への自覚であったともいえるのだ。それゆえ放射能の恐怖を語るものは、一般的には「健康被害」と和らいだ表現がされるが、「死」のイメージを植え付けるという意味で「啓蒙者」として振舞うことになってしまうのだ。

放射能を軸として、また「先進／後進」、「知識人／大衆」という対立が繰り返されてしまったような気がする。さらには今回、原発を通じて「都会／地方」という問題もぶり返しているようにも思われる。「後進」「大衆」「地方」といった負の記号を背負ったものは確かに魯迅がいうような「鉄部屋」でただ安眠をむさぼっているわけではない。つまり無垢な一方的な受動者ではありえない。これは魯迅が「それぞれに他人を奴隷にしすると同時に、自分も他人の奴隷となる可能性」[4] を持つと称した、秩序を維持するための積極的な存在でもある。もちろん知識の「啓蒙」によって、彼／彼女らが上昇することで、「先進／後進」といった対立は解消されるかもしれない。放射能に例えれば、「残った人間」にも放射能の知識を増やさせる、つまり「死」を意識させることにでもなるであろうか。だがもはやこの時代においては一方の側の知識の増大によって対立が解消されるわけではないのはいうまでもない。

4）魯迅「灯下漫筆」（一九二五年五月一日、二二日『莽原』週刊第二期、第五期に発表）。後に『墳』に収録。『魯迅全集』第一巻、二二七頁。

五、「戦後」か？「戦中」か？

しかし放射能拡散という非常事態に決断出来ない人たちを「冷静な判断ができず」「まだ大丈夫だと思っている」と括ってしまうことにはもう一つの効果があることを見過ごすわけにはいかない。そうすることにより彼ら／彼女らを「騙された人たち」とみなすことができるのである。「騙された人たち」が悲惨な状況に陥った例として私たちは先の満州事変から日中戦争、第二次世界大戦を経てそして敗戦という歴史を知っている。「騙された」という視点を採れば責任の所在は一挙に嘘の情報を流した方に集中し、「騙された」方は免責されることになる。その意味で、やはり戦後の構造を反復しているといえるのだ。政府と東電が軍部に置き換えられ、民衆は無傷のままであると。そこでは民衆は被害者のままの純真無垢な存在に置き換えられる。だが大陸に侵略していった軍部が、ある意味で閉塞感に陥った農村部の期待を背に受け泥沼に陥ったように、原発も何の将来の展望も持てない周縁化された地域の期待を背負って存在していたことは確かなのである。もちろんそうかといって私は原発の推進を容認するわけでもないし、原発が地域経済に恩恵を与えているのだから容認せよ、といった粗雑な議論に与するわけではない。

むしろ福島などの現地での問題はもはや単純な「反原発」というものではなく、今後百年続くともいわれる放射能とどのように「つきあっていくか」という問題にうつっているように思われる。放射能の熱心な測定も目先のためにというより一〇年、二〇年後に表面化するであろう健康被害を訴える裁判のためのものであることははっきりしている。

そう考えると、震災がおこり原発事故が発生した数日間は「戦中」だったような気もする。確かにその数日間の、計画停電も含めた混乱は七〇年代に生まれた私にとっては初めて知りうる、戦争「のようなもの」だったのかもしれない。むしろ初めて外部から「死」というものを生々しく突き付けられた瞬間であったとでもいうべきであろうか。ともかくも今現在の

様々な動きを「復興」という場合は、明らかに「戦後」という時空間が設定され、ゼロからの仕切り直しが前提とされるはずだ。だが放射能という不安がある限りゼロからの仕切り直しは不可能である。それは震災がおこり原発事故が発生した数日間の継続であり、やはり「戦後」ではなく百年続く「戦中」なのであろう。またそれは放射能という、みえない「死」を日常化するという今まで誰も経験したことのないような奇妙な「戦中」でもある。

六、「抑止力」としての戦後空間

その意味で振り返ると、戦後約七〇年は徹底して「抑止」の空間であったといえる。反核運動の「二度と過ちを繰り返しません」というスローガンに代表されるように、それは徹底して破裂と破滅を回避するように仕向けられていた。俗ないい方をすれば「臭いものにふた」をしつづけていた空間であった。反核運動は核による破壊を人類の滅亡としてイメージしたのであるが、もちろん、それは核が「抑止力」として機能し、米ソを中心とした核保有国が絶対的な権力を行使できるという奇妙な均衡を可能にしていた冷戦空間を補完するものであったといえるであろう。つまり「二度と過ちを繰り返しません」という平和主義が、戦争への判断の放棄をもたらし、目の前の戦争を産み出している秩序への加担となっていたのだ。現実的な諸矛盾は「人類の滅亡」という黙示録的な神話的イメージによって均衡化されてしまう。

その時、「帝国主義、核兵器は張り子の虎だ」と繰り返した毛沢東の言葉が確かに今回は現実味を帯びて私には理解できる。この発言は当時形成されつつあった冷戦空間そのものの虚偽性を告発する、メタレベルでの発言だったと考えられる。ここでの帝国主義とは古典的な意味でのそれではなく、核保有国同士の超国家的な抑止空間＝冷戦構造を新しい「帝国主義」と読んだのであろう。つまり「人類の滅亡」を抑止するという美名のもと、

国際政治において超大国として独占的に権力を行使することの虚偽性を告発したのだ。そして同時にそれは核兵器というものが一切か無か、破滅か美しい世界化かという二者択一的な神話的イメージで語られるべきではなく、それが政治的・社会的・文化的な要因で出来あがったあくまで（人によってつくられた以上、同じく人によって廃棄もできる）人為的なものであることを強調する側面もある。その構造を踏まえて、当時の中国の核保有は確かに冷戦構造に対抗的に参入するための戦略であったと理解できる。原子爆弾を使用することにより、それは敵の壊滅だけではなく、自国民の生命の危機をももたらすわけであるから。人類の滅亡というイメージのもとで「抑止」による国際政治における大国の権力独占に風穴をあけるという意味で第三世界の核保有は戦略としてありえたのである。「抑止力」で成立していた冷戦構造において第三世界が発言権を持つためには逆説的に核を持たなければならなかったという戦略の次元で核の状況を見ずに、単に道徳主義的に核保有を糾弾し続けるだけでは、問題の根本は見えないであろう。

もちろん、核兵器と原子力発電を同時に論じるのには慎重さが必要であろうし、国家戦略に深くかかわる核兵器と現地の人たちの生存権・生活権の問題に深くかかわる原子力政策を峻別しない私のいい方は乱暴なのは承知している。核兵器の問題についてはまた別の観点から論じられなければならないだろう。しかし今回の福島第一原発でわかったのは、平和利用ということで牙を抜かれた虎も、やはり張り子であったということだ。しかも今回の福島第一原発の事故によって、それまで「抑止力」によって押さえつけられていたものが一気に噴き出てきたといってもよい。それは東京の電力を東北という見えないところで中心的にまかなっていたという事実、苛酷な原発労働の実態、原子力にかかわる利権の構造などなどのこれまで「抑止」されていたものが一気に白日のもとに晒されたのである。もちろん、すでにスリーマイル島やチェルノブイリの事故があった。しかしそれも反原発運動は「そうならないように」という「抑止」によって語ってき

たのである。

だがもはや「抑止」は終わった。様々な手段で「抑止」されていたものが、「想定外」のもとに一気に爆発してしまった。今我々が直面しているのは、「抑止」の空間が終わった次の段階である。核物質の爆発による放射能の拡散に、滅亡というイメージで語られる美学的な要素は一切存在せず、ただ単に新たな生存空間が与えられただけであった。核によって世界は終焉するといわれていた。しかし単に新たなる世界が始まったばかりなのである。そしてその新しい生存空間とは、子どもが晴れた日に外では遊べないというようなグロテスクな空間なのである。

七、おわりに

私なりに得た結論めいたものは、私には今回の件が、抑止の空間として閉じられていた日本の「戦後」が本当の意味で無効にし、新たなる次元へと移行したのではないかということである。今後、政治、社会、文化、科学技術など様々な方面からの反省が出てくるであろう。問題はそれらの反省が日本的な文脈を越え、世界的に共有できるものとなりうるかどうかであろう。近代日本史における「復興」という「物語」が、例えば関東大震災の場合は当時の帝国主義同士の植民地をめぐる覇権争いを背景とし、第二次世界大戦後の場合は冷戦構造というあらたな世界情勢に規定されていたように、東日本大震災からの復興という「物語」も日本一国で閉じられることはないであろう。例えば原発に関しては、その賛否の立場に関わらず、日本国内においては相対的に原発へ依存する割合は低下すると思われる。問題は国内では原発依存度が低下するにつれて、その原発が国外、とくにいわゆる第三世界に輸出されていく傾向についてである。事実、福島を視察した国連の事務総長は、エネルギー問題の観点から、世界的に見れば、特にこれから膨大な電力需要が予想される第三世界などでは、原子力

エネルギーへの依存を弱めることはできないと明言している[5)]。誤解しないでいただきたいのは、ここで私は日本の原発輸出を善悪の基準で判断するのではないということである。重要なのは日本の今後を考える際には、否応なく近隣諸国、特に中国や朝鮮半島を一帯とした東アジア地域の政治・経済・文化動向を考慮に入れなければならないというごく当たり前の事実である。確かに今回の私の体験も、今のままでは、東アジアで通用するかどうかにはかなり懐疑的であるし、隣国の人々にも訴えかける言葉を獲得することが今後の私個人の課題となるであろう。

また今回は先に述べたようないわゆる知識人と民衆といった古くから存在し続ける問題や戦後社会の問題を新たに考え直す契機ともなったのは事実である。例えば今回、前述の脱出する／出来るものと脱出しない／出来ないものとの関係が先覚者と落伍者との関係として、そのまま魯迅の「吶喊・自序」にあるような有名な「鉄部屋」の構造の反復であるかのように思われた。打ち壊せそうもない鉄部屋の解体とそこからの脱出を語る先覚者と、その可能性にためらいつつ助力する魯迅という『吶喊・自序』にあらわれる構図が、そして「鉄部屋」のなかにとり残される人々との関係が、私の今生きているそのなかで非常に現実味を帯びて迫って来たのである。誰が先覚者で誰が魯迅なのか、そして現代における「鉄部屋」とは何なのか？実際、私は「残った人」である母親と地震発生数日後、つまり原子炉爆破があって放射能拡散も問題となっていたその時期に、やっと電話で直接話すことが出来たのだが、確実に放射能の拡散を浴びているにも関わらず、やはり根拠なく「大丈夫だ」というしかなかったのも事実である。そしてその時、「若し我が八十歳の母上が、天国があるかと問はれたら、私は躊躇することなく有ると答へるだろう」[6)] と日本語で書いた魯迅が頭に浮か

5）2011年10月７日、ＮＨＫニュースのインタビューによる。

6）魯迅「私は人をだましたい」（原文日本語）、『改造』一九三六年四月号に発表。後に作者によって中国語に翻訳され（中国語題名「我要騙人」）、『文学叢報』月刊第三期（上海、一九三六年六月）に発表。後に『且介亭雑文末編』に収録。『魯迅全集』第

んだのも事実なのである。

そして私の故郷であり、母の故郷でもある宮城と福島の人々は（もちろん関東一帯も含む近隣地域の人々は、ひいては日本全体は）、今後百年続く放射能汚染の現状と向き合っていかなければならない。その長期にわたる時間性のなかで「批判」や「闘争」の新しい形態もこれまで以上に模索されなければならないだろう。確かにその意味では東日本大震災は新たなる「起点」ではあるだろう。だが繰り返しになるが、その「起点」をこれまでの物語化された単純な経済発展になぞらえられるような「復興」の「起点」に収斂させるわけにはいけないことはいうまでもないことである。

最後に、最近はだいぶ落ち着いてきたが、「原発推進／脱原発」の議論が盛んだった時に、些かうんざりしているなかで読んだ魯迅の次の一節が頭から離れない。

> ある日などは、スイカを食べるときは、我が国の国土がスイカのように分断・切断されていることを思うべきだと教えていた。なるほど、時間・場所・事柄にかかわらず、常に愛国的であることは、非難すべきではない。だが、そんなことを思いながらスイカを食べるなら、私にはきっと呑み込めない。かりに無理して呑み込んでも消化できず、腹がしばらくはゴロゴロ鳴ってしまうだろう。……思うに、もしスイカでもって比較し、国の恥を講義してから、すぐさま喜び勇んでそのスイカを食べて、血肉の栄養にすることができるのなら、その人は感情がマヒしているのだろう。そういう人にどんな講義をしても、効果は少しもない。……。そのように、一日中、泣きべそ顔をして飲み食いするなら、じきに、胃も口もダメになる。敵に抵抗するどころではない。
>
> ところが人は往々にして、こういう奇怪な事をいいたがる。スイカ

六巻、五〇五頁。

一つでさえ、普通に食べることを主張するのを嫌がる。実は、戦士の日常生活は、全部が称賛と感動に値するものではない。ところがまた称賛と感動に値することに、例外なく関わりあうからこそ、現実の戦士となるのである。[7)]

この言葉から日常と思想との関係、そして実践のあり方などを新たに考え直すきっかけとなったのは確かであった。今後とも魯迅を通して日本や中国の近代の問題といったものを思考し続けたいと思っている。

7）魯迅「『這也是生活』……」（一九三六年九月五日、上海の『中流』半月刊第一巻第一期に発表）。後に『且介亭雑文末編』に収録。『魯迅全集』第六巻、六二五－六二六頁。